

# 渡辺村の構造について

## 絵図と被差別民

The Structure of Watanabe-mura : Illustrations and Discriminated People

村上紀夫

MURAKAMI Norio

はじめに

①下難波村領内所在「渡辺村」の景観

②木津村領所在の渡辺村

おわりに

### 【論文要旨】

本稿に与えられた課題は内なる異文化としての被差別民について論ずるというものであったが、ここでは大坂のかわた村、渡辺村に関する絵図の読解を通じて近世における被差別民の具体像と社会の意識のずれを明らかにすることを目指したい。渡辺村は17世紀後半には渡辺村が下難波村領にあったが、当時の空間構造については先行研究でいくつかの復元が出されているが若干の検討の余地を残している。下難波村領内所在時の渡辺村は「由来書」と絵図の景観を対照させると村を南北に走る3本の道を主軸としてE字型をした4町を基準とし、後に2町が接続し南側に拡張した景観をしていたと考えられる。こうした景観は元禄期に木津村領内に移転した後の景観にも影響を与えている。先行研究で指摘されているように下難波村当時の町共同体を維持するため空間的にいくつかの無理を看取することができる。いずれにせよ、渡辺村は移転前後ともに一貫して町としてのまとまりをもち、その景観にも共同体の存在が影響をあたえていたことが知られる。しかしながら、近世に作成された最大・最詳といわれる版行大阪図『増修改正摂州大阪地図』では、町の景観は複雑な道の曲折まで表現しているにもかかわらず、この図では渡辺村を「穢多村」と一括りに身分名で表記するのみで、町の名称まで記載されていない。本図の作成者がこうした情報の取捨選択をした背景には何らかの基準があったはずである。まず想定される地図利用者にとって必要な情報の最大公約数的な部分を掲載すると考えれば、省略された部分は必要ないと判断された情報であるといえよう。つまり、木津村の町名は必要であるが、渡辺村についてはそこが「穢多村」であること、町場を形成していることがわかれば十分である、ということであろう。こうした絵図における情報の取捨選択から、近世大坂における社会の被差別民への視線と意識を読み解くことができるのではないだろうか。

## はじめに

本稿に与えられた課題は内なる異文化としての被差別民について論ずるというものであった。しかしながら、果たして被差別民が「内なる異文化」であるかについて、まず議論する必要がある。 「内なる」という点についていえば、何の「内」であるか、「異文化」の「外」を規定しなければならない。そうした時、被差別民の「外」とは被差別民以外の存在と言うことになる。被差別民という語自体が、「差別される」という受動的な意味合いを含む、換言すれば他者が「差別」という行為によって規定されている言葉である以上、論理的には被差別民以外の存在とは「差別する側」ということになる。とすれば、「内なる」と言ったとき、既に差別する側とされる側を峻別する思考が働いていることを示している。そこにこそ、被差別民を「内なる」他者として「差別する」ことを合理化する、「差別する側」の意識を窺うことができるといえよう<sup>(1)</sup>。

続いて「異文化」について検討してみよう。まず、被差別民の「異文化」について考える前に、外部である差別する側、すなわち被差別民以外全体に「被差別民」の文化をとりわけ異文化として析出しうるほどの共通する文化というものはあるのだろうか。そう考えたとき、その多様性はすぐに思い当たる。では、「異文化」として一括しうるほどの「文化」が共通性して被差別民にあるのだろうか。それについても、例えば被差別民であるかわた・長吏身分の東西での違いなどはよく知られていることであるし、生業などはむしろ地域の要請や条件に規制されることの方が多く、そうしたものを例示することは困難である。むしろ幕末期になれば・かわた身分の間には近隣の村落同様に年貢を負担しているという「かわた百姓意識」がかわた村に広まり、領主の政策に対する抵抗の論理として鍛え上げられていった経緯もある<sup>(2)</sup>。

しかしながら、「異文化」といわないまでも、かわた村を区別する言説や視線が近世社会に全くなかったわけではない。河原者を異民族と結びつける考え方は中世から見られたと言われ、近世以降も儒者や国学者の間では同様にかわた身分を異民族と結びつける見解は根強くあった<sup>(3)</sup>。また、一方でかわた村の側も斃牛馬処理権を応神天皇以来独占的に認められたとするなど、自らの生業に関わってその「由緒」を根拠に権利を主張することがあった<sup>(4)</sup>。近世後期以降こうして形成されたかわた村の自己認識が、近代以降のかわた村の動向を左右することもあったことは既に指摘されている<sup>(5)</sup>。近世には、かわた村を周辺の村落や住民と区別し差別する社会の視線を「由緒」を主張することでとらえかえすこともあったことに注意したい。だが、藤野豊が指摘するように近代になると社会ダーウィニズムの広がりとともに、異民族と被差別部落とを結びつける論理が広がり、被差別部落と「特殊部落」とする考え方が拡大していくとされる<sup>(6)</sup>。

とすれば、「内なる異文化としての被差別民」という課題設定そのものが、差別する側による「被差別民とは自分たちとは異なった文化を持った存在である」という、排除・差別を正当化する意識と無関係のものではないと言えるのではないだろうか<sup>(7)</sup>。

そこで、本稿では「異文化」としての被差別民という視点を一度はずし、被差別民の具体像を明らかにし、それに対する社会の意識との食い違いを浮き彫りにすることで社会の被差別民に対する視線を読み解くことを目指したい。そのために、ここでは絵図を使った分析を試み、その景観を

読み解いてみたい。というのは、近代に都市衛生施策との関連から、被差別部落を「貧民部落」「細民部落」として捉えようとする見方が広がっていくが、実際には近世にかわた村であった地域と「貧民部落」が一致せず、運用面で生じた齟齬を解消するために両者を包括するために「特殊部落」という概念が作られたとする指摘があるからである。<sup>(8)</sup>近世のかわた村の景観を明らかにすることで、近代の「貧民部落」との差異も浮き彫りになってくるだろう。

なお、こうした視点での検討には絵図の分析が欠かせないが、いくつかの先駆的な試みを除くと身分記載のある絵図が公開されることは少ない。絵図と被差別民については既に何度か論じたことがあるが、絵図は被差別民やその集落の具体像や社会の彼らに対する意識を読み解く上では非常に有用な資料である。<sup>(9)</sup>ここでは、こうした資料として充分活用される状態にない絵図を読み解き、被差別民の集落について、その景観を明らかにするとともに、絵図における表現形態から被差別民に対する社会の意識を見ていきたい。なお、本稿では版行図、手書き図、村絵図など様々な種類の絵図に比較的恵まれている大坂のかわた村、渡辺村をとりあげたい。

## ①……………下難波村領内所在「渡辺村」の景観

渡辺村は大坂に所在するかわた村で、近世中期以降は大坂の町から見て南側、木津村領にあった。渡辺村は大坂の町が拡大するに伴って数度の移転を経て木津村領内に落ち着いたことが後の由緒書に記されている。<sup>(10)</sup>由緒書は後世に書かれたものであり、そのまま信用することは無論出来ないが、17世紀後半には渡辺村が下難波村領にあったことは後掲の資料で確認されている。

移転以前、下難波村領にあった渡辺村の空間構造については、渡辺村移転後の本村にあたる木津村の文書や町名をもとに、のびしょうじ氏が詳細にその空間構造を検討し、図1のような復元案を出した。<sup>(11)</sup>その後、のび氏は下難波村領所在時のいくつかの資料から、推論の根拠とした渡辺村の町名が木津村領に移転した後に変わった可能性があるとして復元案を90度傾けたものに修正している。<sup>(12)</sup>この一連の研究により、渡辺村が道を挟んだ家々が町を構成する両側町が6町で構成されている。

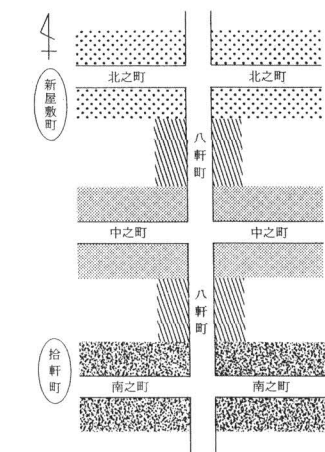


図1 のびしょうじ氏による下難波村時の渡辺村町割復元図

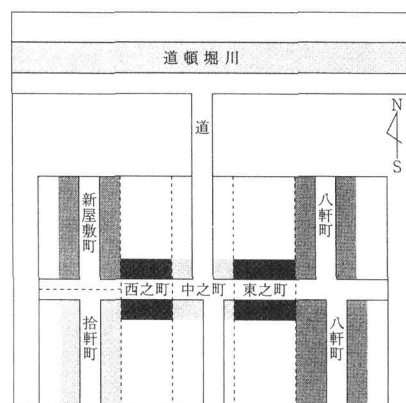


図2 寺木伸明氏による下難波村時の渡辺村町割復元図

たこと、こうした構成は渡辺村移転前から移転後まで一貫して変わらなかったことなど極めて詳細に渡辺村の空間構造が明らかにされた。その後、寺木伸明氏は東之町・中之町・西之町は東西に並んでいたとし、図2のような復元をした。<sup>(13)</sup>「安井家文書」における下難波村領の土地に関する文書の記載を詳細に分析した八木滋氏は、<sup>(14)</sup>のび第2案を支持するとした。

このように下難波村領所在時における渡辺村の景観復元は後世に書かれた由緒書による研究から、同時代資料を使った段階になってきたといえるが、依然として不十分な点も少なくない。とりわけ、のび氏の復元では八軒町が分散していること、西之町・中之町・東之町が道をまたいで南北に広がっていること、<sup>(15)</sup>明暦以降増し地が認められた新屋敷町・拾軒町の位置が不明確な点などは検討の余地を残しているといえ、寺木氏の復元案では中之町が中央の辻の四方にあり、町としての類(正面)が不明確である点が疑問である。

## 1 「由緒書」から

そこで、既にその記載内容については色々と問題点が指摘されており、そのままでは使えないことは言うまでもないが、ここでは「役人村由来書」を検討することから始めたい。というのは、当該地域で「由緒」として一定の意味合いを持って語られていたものである以上、移転以前の様子を僅かなりともいづらか伝えていた可能性はあり、全く荒唐無稽な伝承として切り捨ててしまうことはできないと考えられるからである。「由来」が移転以降の景観なり、権利関係を説明する根拠として書かれている点も考慮に入れつつ、慎重に同時代資料とつきあわせることで由来書の記載を読み込むことかを出発点としたい。

【史料一】  
南北に通り候町を八軒町と唱候、東西に  
町三筋有之、南を南之町と唱、中之筋を  
中之町と唱、北を北之町と唱、四町にて  
住居罷在候、

由来書によると渡辺村は当初 7550 坪の無年貢地を与えられて 4 町が居住し、明暦 2 年 (1656) に人数増加によりさらに 5680 坪の増し地が認められ、拾軒町、新屋敷町を加え 6 町となったという。まず、4 町の景観について書かれたところを見ることにする (史料一)。

絵図に記載された景観を一旦脇に置いて、この記載の示すところに随えば、南北に続く八軒町が 1 町と東西に続く北之町・中之町・南之町の 3 町があったということになる。八軒町を東西いずれに置くかで変わるが、この文章をそのまま読む限りヨか E の形をした配置になるのが自然だろう。

しかし、移転前の町名としては西町・東町の称があり、北・南の町名が移転後の位置関係、あるいは移転後の町名によって変更されており、南北が実際の位置関係を反映していないことは既に指摘のありとおりである。<sup>(16)</sup>

## 2 「大坂三郷町絵図」の記載

そこで、今度は絵図の方から検討することにしよう。木津村領内に移転する前の渡辺村を描いた絵図は手書き・版行図を含めるといづらか存在する。しかし、内部構造まで記したものは明暦期の景観を描く北組総会所旧蔵の「大坂三郷町絵図」<sup>(17)</sup>だけといいたい。この図は、東西に長い長方形

で描かれた渡辺村に、南北に通じる道が三筋と東西に通じる道が記され、道に「かわた村」と注記されている(写真1)。この景観が「由来書」から想定される景観と一致しないことは言うまでもないことである。しかし、本図が明暦期の絵図であれば、「由来書」が四町に加えて明暦2年(1656)に認められたとする増し地分を加えた景観の可能性もあろう。実際、図中には一部、四角く区画し着色された部分があるが、ここは欄外凡例によれば「町役御年貢両役之分」とあり、大坂三郷に準じて除地とされた4町だけを表しているとは考えにくい。

そこで、今度は「由来書」の記載と絵図の景観を対照させることが必要になる。「由来書」の記載と図とを矛盾無く対応させることはできるだろうか。

#### 写真 1

まず、絵図に描かれた渡辺村の町割りを明暦以前の4町部分と増し地として認められた新屋敷町と拾軒町とに切り分ける必要がある。第1の作業として増し地以前の4町を比定する作業から始めよう。

最初に渡辺村の町が道を挟んで対面する一群の屋敷が町を形成する両側町であるなら、町の頬がどこにあたるか、すなわち町はどの道に面して形成されているかを明らかにする必要がある。大坂では町が面している「通り」と平行する「通り」を繋ぐ「筋」にわかれることが多く、交差する東西南北すべての道に町の頬が必ずしもあるわけではない<sup>(18)</sup>。のび論文による復元では町の頬がすべての道に面する形態であったが、果たしてすべての道に町の頬が来る復元でよいのだろうか。

この問いは、換言すると町の主軸は東西になるか、南北になるか、である。ここで、注目したいのは絵図では「かわた村」という注記が南北の3本ある道に書かれていることである。通常、こうした書き方をする場合はその通りに町の頬が面していることが多い。つまり、この図によれば南北に通じる道が町の主軸である可能性が高いということになる。

実際、八木論文で指摘のあるように道頓堀から渡辺村に向って南北に、古道、「かわた東之道」、「かわた西之道」という3本の道が恐らく平行に通じていたことが明らかにされている<sup>(19)</sup>。「かわた」某道と敢えて「かわた」を冠して呼ばれている以上、渡辺村に繋がっていると考えられる。とすれば、これらの3本の道は絵図に描かれた渡辺村を南北に走る3本の道に接続していると考えるのが妥当だろう。渡辺村の外部、道頓堀方向から接続する道がこの3本なのであれば、こうした道に面して町が形成されるのが自然であろう。

### 3 道と屋敷

続いて渡辺村の景観を復元するための次の手続きとして、その基準となる道と屋敷について検討したい。八木氏は、古道・東之道・西之道の存在を指摘されたが、西之道と東之道の距離は約70間、西之道のさらに西に古道があると想定された。こうした道の間に並ぶ当時の渡辺村の屋敷について、僅かながら窺うことができる史料が下難波村の延宝検地帳である。この検地帳には、下難波村領内にあった渡辺村の屋敷地について、64筆分の記載がある。全体については別表を参照されたいが次のようになっている（史料二）。

【史料二】	
古検下田二反四畝歩	一屋敷 拾七間
此分米壹石壹斗九升	但壹石五斗代
古検右之内	七畝貳拾八歩
一屋敷 拾七間六寸	徳浄寺
此分米三斗五升五合	住吉や
但壹石五斗代 <sup>(20)</sup>	宇兵衛
貳畝拾壹歩	
（下略）	

この検地帳については、すでに寺木伸明氏が紹介し、分析を加えているが、ここに記載された屋敷地は渡辺村の屋敷すべてを記したものではなく、渡辺村屋敷地全体の4割程度にすぎない。また、検地帳に記載されている以上、除地とされた4町ではなく、恐らく明暦2年（1656）以降、新規に増し地が認められた拾軒町、新屋敷町に該当する可能性が高い。しかし、渡辺村の屋敷について、おおよその傾向を窺うには十分であろう。さて、屋敷と記した下にある二つの間数が当該屋敷地の間口と奥行きを示すものであろう。すべて右側に記す第1行の方が2行目の間数よりも数値がすべて大きくなっている。

渡辺村の屋敷地については、町場のように道路に沿って短冊状の地割りとなり、所謂「鰻の寝床」のような形態をとっていることは容易に想像がつく。とすれば、数値の少ない方が間口、長い方が奥行であることは疑いないであろう。そこで、間数の1行目を奥行き、2行目を間口として1筆毎に整理したものが表である。ある程度のばらつきや例外はあるが、ほとんどの屋敷は間口が4間強となっている

ことがわかる。こうした間口が均一化しているのに対して、奥行きについては15間内外と20間強の2傾向にわけることができそうである。そこで、以下では便宜上、15間前後の奥行きを持つ屋敷をA群、20間強の奥行きを持つ屋敷をB群と呼ぶことにしたい。

「古検」の地目を見ると、奥行きがA群の屋敷は「中田」「下田」1筆だけ「上畑」があるのを除きすべて田地となっているが、B群ではすべて「中畑」である。「生玉領」の注記を持つものこちらのB群に限られる。とすれば、15間前後の奥行きを持つ屋敷と20間強の奥行きを持つ屋敷については場所の条件が異なっていると考えられそうである。A群の屋敷地は田地にすることが可能な場所だが、B群では高燥地、あるいは微高地となろうか。

A群・B群の所在地についてはひとまず措くとして、検地帳からは渡辺村の屋敷について間口は4間強、奥行きは15間前後、もしくは20間強という大きさが平均的な形態であるということがいえる。<sup>(22)</sup>

別表 延宝検地

名 前	間 口	奥 行	古 検	備 考	
徳浄寺	14	17	下田式反四畝歩		①
住吉や宇兵衛	4.09	17.06	右之内		
はりまや五郎左衛門	40.9	17	右之内		
池田屋次郎右衛門	4.12	15.39	右之内		
伊丹屋新太郎	4.15	14.39	右之内		
住吉屋新兵衛	4.15	17.3	右之内		
備中屋吉左衛門	4.15	17.3	右之内		
出雲屋太郎右衛門	4.42	17.48	右之内		
岸部屋茂右衛門	3.24	16	中田壹畝拾七歩		②
井筒や惣兵衛	3.09	16.09	下田壹反拾壹歩		③
井筒や庄兵衛	2.45	16.09	右之内		
奈良や源兵衛	2.36	16.09	右之内		
備中屋長兵衛	2.36	15.48	右之内		
岸部屋小左衛門	2.36	15.48	右之内		
明石屋助右衛門	2.36	15.48	右之内		
生駒屋久兵衛	2.36	15.48	右之内		
岸部屋三右衛門	2.33	15	右之内		
井筒屋惣兵衛	5.12	16	右之内		④
讃岐屋重兵衛	6	15.48	上畑壹畝拾七歩		
吹田屋久兵衛	7.54	16	中田六反六畝貳拾三歩		⑤
和泉屋弥右衛門	4.18	16.9	右之内		
大和屋久兵衛	4.3	16.9	右之内		
榎屋半兵衛	4.09	15.39	右之内		
豊後屋喜左衛門	4.24	16	右之内		
難波屋惣吉	4.09	16.18	右之内		
豊後屋喜左衛門	4.18	15.54	右之内		
ゑひすや次郎	4.09	15.48	右之内		
明石屋九郎兵衛	4.12	16	右之内		
住吉屋伝左衛門	4.06	15.48	右之内		
備中屋吉右衛門	4.48	16.12	右之内		
播磨屋弥兵衛	4.39	15.3	右之内		
日向屋喜兵衛	4.24	15	右之内		
たいこや七	4.09	15.24	右之内		
住吉屋与三兵衛	4	15.3	右之内		
菱屋平十郎	4	13.3	右之内		
吹田屋久兵衛	4.18	14.3	右之内		
岸部屋三右衛門	4.12	14.12	右之内		
住吉屋七郎右衛門	4.06	15.3	右之内		
岸部屋伊左衛門	4.06	13.18	右之内		
同三右衛門	5	16.3	右之内		

名 前	間 口	奥 行	古 検	備 考	
播磨屋弥兵衛	4	27	中畑老反四歩	生玉領	⑥
河内屋吉兵衛	5.9	16.3	右之内	生玉領	
豊後屋喜左衛門	6.12	21.3	右之内	生玉領	
岸部屋庄兵衛	3.21	21	右之内	生玉領	
同三右衛門	3.21	21.39	右之内	生玉領	
播磨屋弥兵衛	3.06	21.3	中畑式反五畝歩		⑦
池田屋五兵衛	4.06	21.3	右之内		
同次郎右衛門	3.51	21.18	右之内		
奈良屋七兵衛	4.09	20.3	右之内		
池田屋市助	3.45	20.3	右之内		
岸部屋三右衛門	3.45	20	右之内		
河内屋吉兵衛	4.24	20	右之内		
豊後屋喜左衛門	5.09	21.3	右之内		
吹田屋九兵衛	3.45	21.3	右之内		
池田屋さつ	4.03	20.3	右之内		
池田屋次郎右衛門	4.06	21.12	中畑五畝歩	生玉領	⑧
和泉屋伊兵衛	2.54	20.39	右之内	生玉領	
池田屋弥三右衛門	3.24	21	中畑式反歩		⑨
八幡屋三郎兵衛	5.03	21	右之内		
太鼓屋太郎兵衛	5.15	20.3	右之内		
河内屋三郎兵衛	3.15	20.24	右之内		
大和屋四郎右衛門	9.24	21.24	右之内		
河内屋三郎兵衛	6.3	20.48	右之内		

※間口・奥行の数値は間、尺寸として表記した。

この大きさの屋敷を渡辺村を南北に走る3本の道に面した形で配置してみよう。渡辺村東端から東側の道まで15～20間。東側の道から中央の道までの区画は2町分なので30～40間。中央の道から西の道までも同様に30～40間。西の道から渡辺村西端まで15～20間ということになる。ここから、渡辺村の東西幅は道幅を無視すると極めて大雑把な計算だが90間～120間となる。

ところで八木氏は先の論文で安井久兵衛所持地「東西六百間余裏行式拾間程」の地について、「かわた東之道」から「西之道」までが「四反五畝廿四歩」なので、70間弱と計算している。先程の町の奥行きに基づいた概算では道から道までの1区画は2町分の30～40間となったので、それを当て嵌めると東之道から西之道は1区画ではなく、2区画あったことになる。つまり、東之道と西之道の間にはもう1本、道がないと計算が合わなくなるのである。八木氏は「古道」を「西之道」よりも西と想定されたが、そうなれば渡辺村の中央にある道を「古道」とするのが適当であろう。道の名称にしても「古道」に対して「西」「東」と考えた方が自然ではないだろうか。

東西両端の道が「西之道」「東之道」、中央に「古道」があるのであれば、これらの道に面した町は、道の名称に対応した「西之町」「東之町」と「中之町」であろう。

ここで、先程由来書から想定された明暦以前のE型の町割を、90度回転させて道と町が対応するように配置すれば図3ようになる。のび復元と異なるのは西之町・中之町・東之町が東西の通りよりも南までいかない点と八軒町を片側町として想定していることである。八軒町を片側町とし



ているのは町の正面が北側なので町の正面を北に向けているためである。

明暦以前における渡辺村の景観がこの図のようなものであるとすれば、その東西南北の大きさはどうなるだろうか。西之道から東之道までの2区画70間弱に東西の端にある2町の奥行き30間～40間を加えれば渡辺村の東西幅は約100間ということになろう。ところで、明暦以前の渡辺村は「役人村由来書」によれば7550坪であったとされ、大坂三郷と同

時に除地となり「于今無年貢地」であるという。計算と簡略にするために渡辺村が完全な長方形であると仮定し、東西100間とするならば、南北は約75間となる。

八軒町の奥行き15～20間と道幅を引くと、西之町・東之町・中之町の南北は50間前後だろうか。とすれば、聊か大雑把な計算だが、両側町で南北約50間の道に面した西之町・東之町・中之町と東西約100間の片側町である八軒町は、総間口・面積ともほぼ同じになる。

また、先に中央の道を「古道」と呼ぶのではないかと推測したが、「古道」が東西の道に対して古いという意味の「古道」であれば、当然それに面する町も同じように東西の町に比べて古いということになろう。由緒書などでは全く記されていないことではあるが、4町の間にもそうした新旧の関係があったと考えることはできないだろうか。中之町のみが正宣寺を惣道場とし、他の町が徳浄寺を惣道場としていることも寺院成立と町の形成を一定反映している可能性があるのではないだろうか。

#### 4 拾軒町と新屋敷

続いて、明暦年中に増地が認められて新たに形成された拾軒町と新屋敷が4町とどのように接続しているかについて検討したい。この2町については「由来書」には先の4町に関する記載に続き、次のようにある（史料三）。

【史料三】  
一、明暦貳申年六月、御奉行松平隼人正様御時代、当表三郷町家追々出来仕、村方迎も人数相増住宅間狭に付、増地御願奉申上候処、御聞濟被為在、五千六百八拾坪増地面被為下置、右四町地面続き、南之町西へ続拾軒町、北之町に続き新屋敷町、都合六町に相成候、

この記述も4町に関する記載同様、方位が一致せず、そのままでは使うことができない。では、北之町・南之町を西之町・東之町と読み替えて、復元図の西之町より西に繋げばどうだろう。こうすると東から拾軒町・新屋敷が八軒町前の道を挟む両側町となるL字型の町を想定することができるが、残念ながら絵図（写真1）の景観と一致しない。そこで、ここでは絵図の表現により、八軒町の南側に増し地部分を置いてみると図4のようになろうか。

ここで想定したように先に東西に八軒町があり、後にその南側に南北に増し地分の町が形成されたとすれば、南側へ南北に走る道の形成が問題になろう。ありうるとすれば、南側に町を形成する際に八軒町の屋敷の一部を撤去したか、あるいは八軒町にあった既存の南側へ抜ける路地を拡張したかである。そこ

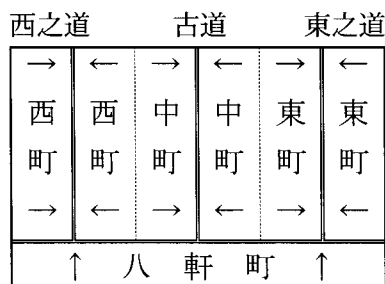


図3

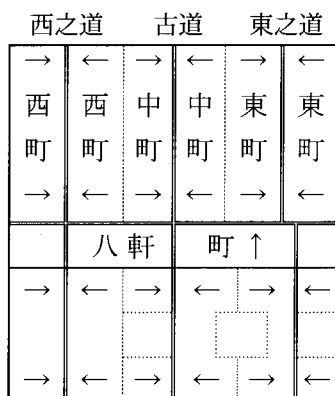


図4

で絵図を見ると、東側の道が南北で一直線に接続せず、僅かに南半分が東に寄っていることが看取できる。この事実は最初から東側の道が一度に形成されたものではなく、北半分と南半分が段階的にできたものであることを示唆していよう。とすれば、ここでは北側の3本の道を基準としながら、それ近い既存の路地を拡幅することで南側の道をつくったものである可能性が高いのではないだろうか。

増し地の部分については、図2は絵図の町割りに沿って大まかに当てはめているに過ぎず、具体的な広さや四辺の大きさなどは正確なものではない。しかし、幸い当該部分を詳しく見るために、先に触れた延宝検地帳の記載が参考になる。というのは、検地帳

に記される屋敷地は当然だが年貢地ということになり、除地の4町は対象外になっている。つまり、先に示唆したように、検地帳所載の屋敷地は明暦2年（1656）に認められた増し地部分について記していると考えられるからである。

## 5 検地帳の検討

検地帳に記載された屋敷地には「古検」、すなわち太閤検地の際に定められた等級と反別が付記されている。そこで、太閤検地時に同一の田畑であったとされる屋敷地は、延宝検地段階では複数に分割されているが、空間的にある程度まとまりを持ったものであることが推定できる。先の表には、「古検」で1筆とされていた屋敷地をひとまとまりとして①～⑧までの記号をつけておいた。

次にこれらの屋敷地がかつて田畑であった頃の形態を検討してみよう。①から⑧までの空間のうち、田畑の等級は中田、下田、中畑の3種類がある。上町台地に近い東側は恐らく高燥で営田には不向きと思われるので、恐らく西から中田から下田、中畑の順に並んでいたのではないだろうか<sup>(23)</sup>。すると、前述の15間前後の奥行きを持つA群の屋敷は西に、を20間強の奥行きを持つ屋敷B群は東にあつまるかたちになる。こうした形をとるのは東から西に緩やかに傾斜した当該地域の自然地形に制約されたものではないだろうか。

検地帳記載の屋敷地は1町6反3畝18歩であるから、仮に渡辺村の東西を100間とすると、南北は50間弱という計算になる。この矩形の渡辺村南側に拡大された年貢地からなる空間がすなわち新屋敷町と拾軒町である。

ここまで下難波村に所在していた頃の渡辺村の景観について、推測をまじえながら絵図と史料をつきあわせて復元を試みた。渡辺村はその後、上げ地によって下難波村領を離れ、元禄期に南西にある木津村領内に移転することになる。それでは、木津村領に移転した後の渡辺村は如何なる景観をしており、どの程度移転前の景観を反映しているのだろうか。次節ではその点について見ていくことにしよう。

## ②……………木津村領所在の渡辺村

### 1『摂津国諸記』所載図から

木津村領に移転した渡辺村の町割りについては、天保期に新規に道場を建立するにあたって本願寺に差し出した図が『摂津国諸記』に掲載されており、町名も含めて記載されている(図5)。(24)図の「溝」とある部分の北側2区画は移転後、暫くして拡張した部分であるから、(25)ここでは考察の対象外とする。

既に、のびしょうじ氏はこの図に見える渡辺村の景観が移転前の景観を一定程度反映したものであると指摘されているが、確かに次に挙げる太鼓の胴内部に書かれた二つの銘文は、実際に太鼓屋又兵衛が「道頓堀」にいた頃も移転後も一貫して「中之町」と称する町に居たことを示している(史料四)(史料五)。

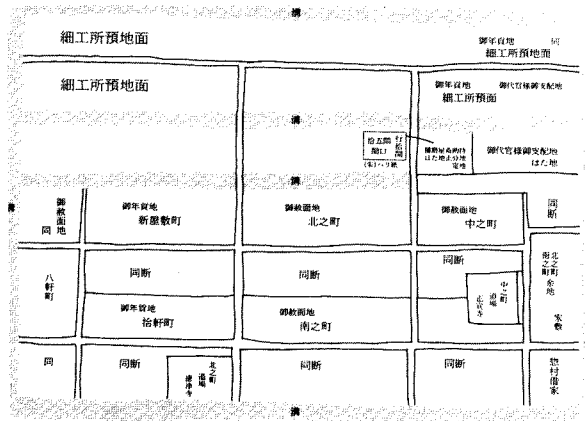


図5 天保期渡辺村町割略図

ところで、この記載で「中之町南之筋北がわ」としている点は重要である。すなわち「中之町」の太鼓屋又兵衛について住所を記すにあたり正確を期すためには「南之筋」と注記が必要であったことと、「北がわ」と付記していることから、この「中之町南之筋」は東西に走る道に面した南北の屋敷からなる両側町であったことが明らかになる。つまり、図では「中之町」とされた部分の南側にある二つの「同断」が具体的に何町にあたるのか判然としないが、こうした表現から「中之町」の南側にある二つの「同断」は、ともに「中之町」を指していることになる。このように中之町を南北に配置したのは、のびしょうじ氏が指摘しているように下難波村当時の中之町構成員が、その共同体を維持したまま木津村領に移転したため、移転後も「中之町」としての空間的なまとまりを維持するためにとられた苦肉の策であろう。(28)

さて、ここで先の図に町名を書き込み、町名注記の天地を参考に町の頬を矢印で表現した概念図が図6である。東から五区画を便宜上Ⅰ～Ⅴ区画と表現し、以下に移転前の想定復元図との対応関係を詳しく見ていくことにしよう。

Ⅰ区画は後回しとし、Ⅱ区画から見よう。ここは前述のよ

<p>【史料四】</p> <p>摂州大坂道頓堀内渡辺村 中之町極張了 太鼓屋又兵衛(花押)</p> <p>元禄九歳 丙子八月吉日(26)</p>	<p>【史料五】</p> <p>癸 正徳参年八月吉日 巳 摂州大坂木津渡辺内中之町 南之筋北がわ細工人 太鼓屋又兵衛吉重(花押)(27)</p>
--	--

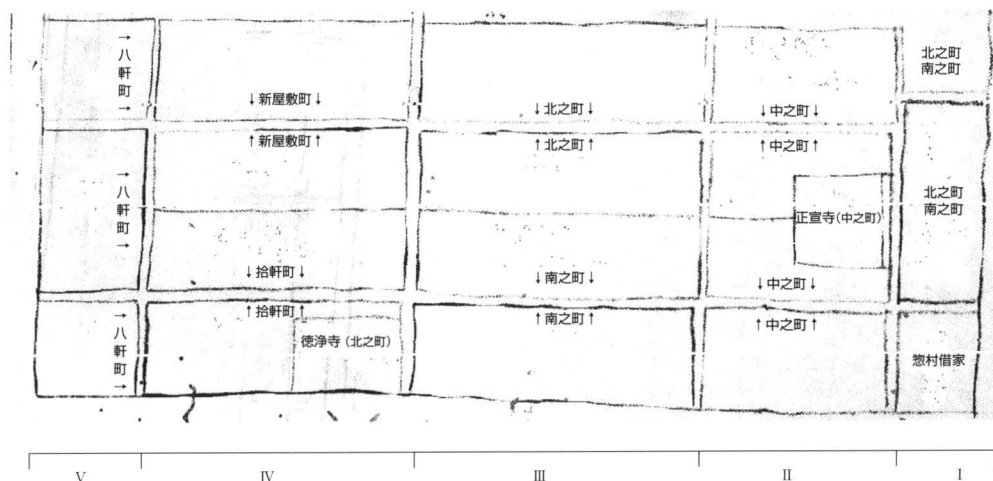


図6

うに「中之町」である。北之筋・南之筋に分かれていたと見られるが、Ⅱ区画はⅢ・Ⅳに比べて東西幅が狭く描かれている。これが実際の町の幅をある程度反映しているとするれば、移転前の「中之町」の間口を移転後も確保するために二筋に町を分割したと考えることが出来よう。移転前の中之町は渡辺村の中央を通る「古道」に面する町であったが、そうした位置関係も考慮して、もっとも村の出入りに近い区画を確保していると考えられることもできよう。「古道」が移転後の「渡辺村道」に対応していることにも注目したい。

Ⅲ区画は北之町、南之町である。これはのび氏が移転前の「西之町」「東之町」に比定したが随うべきであろう。当該町を「御赦免地」としていることから新屋敷・拾軒町の拡大以前、除地とされていた部分の系譜をひくと考えて大過ないであろう。

Ⅳ区画は新屋敷町と拾軒町である。「年貢地」とあるが、移転以前の延宝検地帳に屋敷地として登録されて高を結んでいる部分を継承していると見てよいであろう。拾軒町に「徳浄寺」があることも移転前の景観を反映しているといえよう。

Ⅴ区画は八軒町である。比較的村の出入りに近い中之町や北之町・南之町から離れ、最も奥まった部分にある。先に復元した際に、明暦以降は八軒町を分割するように道が南北に貫通し、新屋敷町と拾軒町に繋がったと想定したが、興味深いのはここでも八軒町を道が貫き、町を分割していることである。これは移転前に「角」にあたり、2面を正面とすることの出来た角地にあった屋敷の権利を保障するための手段だったとは考えられないだろうか。

以上、聊か推論に推論を重ねるようなかたちになったが、渡辺村の景観について移転前後を比較検討し、移転前と後の景観が極めてよく対応していることを確認することができた。

## おわりに

ここまで見てきたように渡辺村は、既に先行研究<sup>(29)</sup>でも指摘されていたように元禄の移転前後ともに、道を挟んだ両側に家屋が並ぶ町としての景観を持ち、この町は共同体としてのまとまりを持っていたことが確認できた。遅くとも天明5年(1785)以降は町毎に町を代表する年寄が置かれ、「町」

## 写真 2

として一層の自立性を持つようになった。<sup>(30)</sup>

木津村領内の渡辺村については最大・最詳といわれた文化3年（1806）版行の大阪図『増修改正摂州大阪地図』にもかなり詳しく描かれている。後に本図を下敷きにしつつ簡略化し、小型化した絵図はいくつも刊行されるが、そこでは渡辺村は単純な田の字型に描かれることも少なくないが、本図では複雑な道の曲折まで表現しており、何らかのかたちで実際の渡辺村を見てなければ描けない表現となっているのである（写真2）。

しかし、もう少し詳しく絵図を見てみよう。隣接する木津村も村とはいいながら、他の村のように絵で表現するだけのものではなく、内部構造がわかるように道と町割りが描かれる。木津村では道の部分に町名を記載している。道を挟んだ両側が一つの町共同体を形成する両側町であればこうした表現が最も合理的であるといえる。しかし、この図では渡辺村を「穢多村」と一括りに身分名で表記するのみで、町の名称まで記載されていない。渡辺村も両側町を形成しており、各町に名称があったことはここまで見たとおりであるにかかわらずである。また、この時期の渡辺村の表現についても聊か不審な部分がある。というのはここに描かれた部分は木津村領に移転した際に除地として認められた、そうした部分に限られている。しかし、この当時、渡辺村はすでに除地として認められた範囲では収まりきらず、南北に居住域を拡大しているのである。例えば文化3年（1806）、違法な小屋を作っているとして木津村が絵図を作成、翌四年には「役人村」が小屋の撤去を約束するが、その後も撤去の日延べを申請していたが、文政2年（1819）に火事で一切が焼失し、結局文政3年（1820）には堂面の畑地を細工場として使用することを認めていることでもそれは明確であるが、こうした部分については一切記載されていない。<sup>(31)</sup>

しかし、一方で「穢多新家」などの記載もあり、中島の方へ居住地を広げていったところは記載がある。

本図の作成者がこうした情報の取捨選択をした背景には何らかの基準があったはずである。まず想定される地図利用者にとって必要な情報の最大公約数的な部分を掲載すると考えれば、省略された部分は必要ないと判断された情報であるといえよう。つまり、木津村の町名は必要であるが、渡辺村についてはそこが「穢多村」であること、町場を形成していることがわかれば十分である、と

いうことであろう。一方で、中州に「穢多」が移住していることは必要とされた。こうした表現の取捨選択から、近世大坂における被差別民への視線と意識を読み解くことができるのではないだろうか。

#### 【付記】

本稿脱稿後、のびしょうじ『被差別民たちの大坂』（解放出版社、2007年）が刊行された。本書第4話「難波村時代の渡辺村」において、のび氏は由緒書の記載によらず、同時代史料に依拠して難波村時代の渡辺村の景観に関する新たな試案を提起されている。筆者の復元案とは異なっており、本来であれば氏の新たな復元案についても検討を加えるべきところであるが、今回は間に合わなかったことをお断りしておきたい。

#### 註

- (1)——異民族起源説にともなう「特種部落」観はその典型であろう。藤野豊「被差別部落」（『岩波講座 日本通史』第18巻「近代三」、岩波書店、1994年）参照。
- (2)——「かわた百姓」意識については、のびしょうじ「近世皮多の抵抗意識－皮多百姓意識の形成と伝播－」（『地方史研究』第30巻2号、1980年4月）を参照。
- (3)——上杉聡『明治維新と賤民廃止令』（解放出版社、1990年）、上杉聡「近世－近代部落史の連続面について」（北崎豊二編著『明治維新と被差別民』解放出版社、2007年）
- (4)——和泉国で一村立のかわた村である南王子村は、生業に関わっては、かわた身分としての由緒を主張するが、一方で村格に関わる場合は他の百姓同様の格を持っていることが主張されたことが久留島浩「村が由緒を語るとき」（久留島浩・吉田伸之編『近世の社会集団』山川出版社、1995年）に指摘される。「由緒」についても随時適当なものが利用されており、絶対ではないことに留意する必要がある。
- (5)——幕末・維新期のかわた身分の自己認識については、朝治武「維新期における部落の意識と行動」（新井勝紘編『民衆運動史四 近代移行期の民衆蔵』青木書店、2000年）を参照。
- (6)——前掲 藤野豊論文
- (7)——そうした意味で近年の「サンカ」ブームは非常に危険な面を持っていると言わざるをえない。
- (8)——小林文弘『近代日本と公衆衛生』（雄山閣出版、2001年）
- (9)——絵図を読み解くことで被差別民と社会について明らかにしうることについて、拙稿「絵図被差別身分記載」（『歴史科学』第168号、2002年4月）において、若干ながら触れておいた。
- (10)——盛田嘉徳『摂津役人村文書』（大阪市浪速同和教育推進協議会、1970年）
- (11)——のびしょうじ「大坂渡辺村の空間構成」上（『部落解放研究』第118号、1997年10月）
- (12)——のびしょうじ「大坂渡辺村の空間構成」下（『部落解放研究』第124号、1998年10月）
- (13)——寺木伸明「摂津国西成郡下難波村時代の渡辺村と木津村への移転」（『浪速部落の歴史』編集委員会編『太鼓・皮革の町－浪速部落の300年史』解放出版社、2002年）
- (14)——八木滋「安井家文書からみえる難波村時代の渡辺村」（『大阪市立博物館研究紀要』第33冊、2001年）
- (15)——こうした場合、某町1丁目、2丁目と表現される場合が多いのではないだろうか。
- (16)——のび前掲註11、12論文
- (17)——大阪歴史博物館所蔵
- (18)——足利健亮「大阪の『筋』とその意味」（『中近世都市の歴史地理』地人書房、1984年）
- (19)——八木前掲論文
- (20)——『大阪の部落史』第1巻「史料」（部落解放・人権研究所、2005年）
- (21)——寺木伸明「摂津役人村移転前後の屋敷地の状況－難波村旧庄屋関係文書を手がかりとして」（『近世身分と被差別民の諸相』解放出版社、2000年）
- (22)——明暦元年「道頓堀裏町水帳写」（『安井家文書』118号、『大阪市史史料第二十輯 安井家文書』大阪市史編纂所、1987年）等によれば、明暦期道頓堀南にあった屋敷の奥行きはすべて20間であった。

- 
- (23)——絵図でも「渡辺村跡地」の東を畑、西を田としているものがある。
- (24)——のび前掲論文
- (25)——のび前掲論文
- (26)——「浪速部落の歴史」編集委員会編『史料集浪速部落の歴史』（「浪速部落の歴史」編集委員会、2005年）804頁
- (27)——「浪速部落の歴史」編集委員会編『史料集浪速部落の歴史』（「浪速部落の歴史」編集委員会、2005年）806頁
- (28)——寛保2年の「一札之事」（『史料集浪速部落の歴史』22頁）によれば、家持ちとして署名している者が71名、借家として署名している者が62名であった。
- (29)——のび前掲論文
- (30)——塚田孝『近世の都市社会史』（青木書店、1996年）
- (31)——この間の経緯は前掲註11のび論文参照。

（大阪人権博物館，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2007年6月4日受理，2007年9月14日審査終了）

## The Structure of Watanabe-mura : Illustrations and Discriminated People

MURAKAMI Norio

This paper aims to discuss discriminated people as an internal other culture. I will examine illustrations of Kawata-mura, Watanabe-mura in Osaka and will clarify a gap between concrete image and social conscious towards discriminated people in early-modern period.

Watanabe-mura was part of Shimonaniwamura in the late seventeenth century. Although some previous studies suggest several reconstruction of this village, there still are discussions about its spatial structure.

When we compare “Yuraisho” and illustration of the landscape of the Watanabe-mura at the time when it was Shimonaniwa-mura territory, there were three main roads from north to south and the village was letter “E”-shaped with four machi, and two *machi* were later added to the south part of the village.

These landscapes had influence over Genroku-period when the village was later removed to Kizu-mura territory.

Several studies already pointed out that there were several unnatural special features in maintaining the machi-community of Shimonanba-mura.

Nevertheless, Watanabe-mura has been united as machi before and after the relocation, and it is known that the existence of community had impact on its landscape.

However, according to a map made during early-modern period the *Hankou-Osakazu “Zoushuu kaisei sesshuu Osaka chizu”*, renown as the largest and most detailed map showing curves of complicated roads, Watanabe-mura is only shown as “*Eta-mura*” (discriminated village), only under its social status, and there is no name of the village.

The map drawer must have had certain criteria in sorting out this information.

Maps are made to meet the needs of the most expected users. Therefore, abbreviated information was considered as unnecessary information.

In other words, the town name Kizu-mura is necessary, but Watanabe-mura does not need to show its name but just show its social status as Eta-mura and that the existence of a town community.

It is suggested that from analyzing the sorted out information in the illustrated map, we can understand the social views towards the discriminated people in early-modern Osaka.